

1910年代南部黒人の北部移住の構造

竹 中 興 慈

はじめに

近年、一部に南部や西部への「逆流現象」が伝えられるものの⁽¹⁾、アメリカ合衆国の巨大都市とその周辺に居住する黒人は、全黒人人口の75%にも達し、黒人の都市化には著しいものがある⁽²⁾。本稿の目的は、黒人が合衆国史上初めて大量に南部を去り、北部の産業都市に流入し、都市化し始める1910年代に焦点を当て、なかでもこの時代の黒人移住のメッカともいべきシカゴを手がかりに、南部からの黒人の移住構造を明らかにすることにある。

1910年代の南部黒人の北部移住の原因についてこれまで様々な説が提起されてきた。それらはおおむね北部側の“pull”要因と南部側の“push”要因とに分け、前者を第1次大戦勃発による経済の活況、労働力需要の急増とそれに促された賃金の上昇に求め、後者を南部における政治、社会、文化、教育等の矛盾、ないしはこの当時起こったボルウィーヴィルや洪水による被害、耕作方法の変化、低賃金など経済的矛盾に求めるものであり、論者により強調する“pull”ないしは“push”の要因は異っていた。この方法論は“push”と“pull”を対立概念としてとらえる結果、両者の強弱のみに重点を置くいわばバランス論に陥る危険性を孕み、pushはpullを前提とし、pullもpushを前提とし、双方が原因でもあり結果でもあるという視角を欠落させてしまっている⁽³⁾。

最近我が国でも、計量経済学の方法を用いたヒッグズの論文に依拠しつつ古賀氏がこのバランス論を展開している。氏は1910年代に関しては北部における高収入こそが「移動を促す決定的要素」であって、ボルウィーヴィル、洪水などによる生産の減少は綿花価格の上昇によって相殺され、「1916-19年の短期間についていえば北部への移動と南部農業との相関々係はゼロである」とし、

「この時期の移動者の大多数が南部の都市居住者であり、非農業出身者である」との論理展開をとっている⁽⁴⁾。このような氏の見解には、先に述べたバランス論のもつ問題点以外にもいくつかの問題点が含まれているように思われる。

第1に、ボルウィーヴィルの被害は綿花価格の上昇で帳消しになったという議論であるが、これはルイスも認める「綿花価格の変動は……綿花地帯の全ての部分に等しく影響したわけではな」く、地域によって耕作方法や綿花生産コストは大きく異なり、たとえば繰綿では地域によりポンド当りの生産コストが30～60%も違うという点⁽⁵⁾を見落しているといわねばならない。

また、地域差という点では、ボルウィーヴィルという綿花の害虫の被害を州レベルでとらえることの問題もある。後で論ずるように、同じブラック・ベルト地帯の郡でありながら被害を受けた地域と受けなかった地域があり、このことが黒人の複雑な移動を生み出す要因ともなっているが、州レベルで問題を論ずる限りこれらの黒人の動きと北部への移住の関連の究明が欠落してしまうといわざるをえない。

さらに、以上の技術的問題以外にも大きな問題点が残されている。すなわち古賀氏のいう「実収入」の受け取り手の問題である。南北戦争後、南部農業の二大支柱ともいうべき作物質権制とクロッパー制度のもとで、大部分の黒人たちは農民としてはもっとも条件の悪いシェア・クロッパー層に押し込められていたわけであるが⁽⁶⁾、この制度の下で果して黒人クロッパー層は帳消しの恩恵を受けたのであろうかという問題である。この二大支柱から生じる諸矛盾とボルウィーヴィルや洪水の被害の波及との関連、及びその被害の解決方法、いってみれば南部の農業構造から生ずる諸矛盾とその調整ないしは解決方法についての検討なしには、恩恵の受け取り手の問題は論ずることはできないであろう。

第2に、上記の点と密接に関連するが、北部へ移住する黒人の階層の問題である。この問題に関して、内外を通じて最も明確な形で断定したのは古賀氏であるが、氏が緩用しているブランネンの“floating labor”と氏のいう「都市居住者」との関連は必ずしも明確にされているとはいえない。また、純粋に計量経済学的方法によって得られた数値と歴史的事実の問題を短絡させる氏の方

法にも問題があるといわざるをえない。

もとより筆者は移住の構造を検討する際、北部における様々な誘引、とりわけ第1次大戦を直接契機とする労働力需要の実態をも合わせて検討すべきことは当然の手続きと考えるが、この点については別稿を用意しているので、本稿では、さしあたり、南部側の、黒人の北部への移住構造の解明のみに限定することにする。

1. 黒人移住のメッカ＝シカゴ

1910年までの合衆国の黒人人口をセクション別にみると、南部の黒人人口は1900年に初めてを90%割りを、以後さらに低下を続け、一方、除々に比率を高めていた北部は1900年には10%に達し⁽⁷⁾、それ以後さらに上昇を続けている。これを増加率でみると、南部は1900—10年の10.4%から1910—20年の1.9%へと著しい低下を示し、これに比べ北部は16.7%から43.3%へと大幅に増加している。1910—20年の北部の、実数で44万強の増加は南部の3倍近い増加である。増加率では西部が高いが、実際の人口は1920年においても8万弱とわずかである⁽⁸⁾。すなわち、20世紀初頭において合衆国の黒人はいまだ圧倒的大多数が南部に居住していたが、南部の黒人人口、増加率がともに減少傾向にあったのと

表 1

ディヴィジョン	1900—10年の 増加率 (%)	1910—20年の 増加率 (%)
北 部		
ニュー・イングランド	12.2	19.2
ミドル・アトランティック	28.2	43.6
イースト・ノース・セントラル	16.7	71.0
ウエスト・ノース・セントラル	2.0	14.8
南 部		
サウス・アトランティック	10.3	5.2
イースト・サウス・セントラル	6.1	— 4.9
ウエスト・サウス・セントラル	17.1	4.0
合衆国合計	11.2	6.5

出所：Fourteenth Census (1920), Vol. 2, pp. 32, 38—39 より筆者作成。

は対照的に、北部ではそのいずれもが増加傾向にあったのである。

さらに詳しくディヴィジョン別に黒人人口の増加率をみてみると(表1)、1910—20年には1900—10年と比べ、北部の全ディヴィジョンで増加率が一層増しているが、南部の場合は反対に全ディヴィジョンで半減ないしは3分の1以下に鈍下し、合衆国平均を下まわっている。また、1900—10年には北部のなかでもミドル・アトランティックの増加率が高かったが、1910—20年にはこれを上まわる形でイースト・ノース・セントラルの増加率が上昇し、他を圧倒している。すなわち、1910年代になると黒人人口の増加の重点が、同じ北部内でもイースト・ノース・セントラルへと移っていることがわかるのである。

しかし、以上概観してきた北部の黒人人口の急激な増加現象も、ディヴィジョンあるいは州単位の黒人人口比では極めて低く、かのイースト・ノース・セントラルでさえ1920年で2.4%、イリノイ州で2.8%にすぎず、南部で黒人人口比の一番低いウエスト・ヴァージニア州の5.9%にも及んでいない⁽⁹⁾。

しかしながら、都市人口という視点からすると上記とはまったく異った、明確な特徴が表われてくる。黒人の農村人口比は1910年においても72.6%と大きな比重をしめているものの、都市人口は1890年の19.8%から1910年の27.4%へ

表 2

	黒 人 人 口			全人口に占める 黒人の比率 (%)			増加率 (%)	
	1900年	1910年	1920年	1900年	1910年	1920年	1900— 20年	1910— 20年
1. ニューヨーク	60,666	91,709	152,467	1.8	1.9	2.7	51.2	66.3
2. フィラデルフィア	62,613	84,459	134,229	4.8	5.5	7.4	34.9	58.9
3. シカゴ	30,150	44,103	109,458	1.8	2.0	4.1	46.3	148.2
4. ボルティモア	79,258	84,749	108,322	15.6	15.2	14.8	6.9	27.8
5. ワシントン	86,702	94,446	100,966	31.1	28.5	25.1	8.9	16.4
6. ニューオリンズ	77,714	89,262	100,930	27.1	26.3	26.1	14.9	13.1
7. バーミングハム	16,575	52,305	70,230	43.1	39.4	39.3	215.6	34.3
8. セントルイス	35,516	43,960	69,854	6.2	6.4	9.0	23.8	58.9
9. アトランタ	35,727	51,902	62,796	39.8	33.5	31.3	45.3	21.0
10. メンフィス	49,910	52,441	61,181	48.8	40.0	37.7	5.1	16.7

出所：Fourteenth Census (1920), Vol. 2, pp. 50—59 より筆者作成。

と次第に増加しつつあったのである⁽¹⁰⁾。1920年において総人口10万以上を擁する68都市のうち、特に1910—20年の黒人人口増加率が100%以上の都市を抽出すると11都市あるが、これらの都市はロサンゼルスを除けば全て北部に位置し、しかもそのうち7都市（アクロン、デトロイト、クリーヴランド、ヤングスタウン、トレド、シカゴ、ミルウォーキー）までがイースト・ノース・セントラルの都市なのである⁽¹¹⁾。

さらに、1920年の黒人人口からみた10大都市の黒人人口推移等を見ると（表2）、1920年の黒人人口上位位までが北部の都市である。ただし、全人口にしめる黒人比ではこれら3都市が揃って下位3位に位置している。一方、1910—20年の増加率ではシカゴ、ニューヨーク、フィラデルフィアの順に北部3都市が上位をしめ、とりわけイースト・ノース・セントラルのシカゴ市の増加率148.2%が他の大都市の追隨を許さず極だっている。

ところで、1920年において外国生まれの黒人人口は合衆国全体でも7万3,803人とわずかであるから⁽¹²⁾、これまで検討してきた1910年代北部、とくにシカゴ市における黒人人口の急激な増加は、自然増を考慮したとしても、その大部分が南部からの流入の結果と考えられる。従って、やや誇張していえば、1910年代に南部から流出した黒人の大きな部分が北部の大都市シカゴを目指して移動していたといえよう。

1910年代に南部から北部へ移動した黒人数について、同時代の研究者が提示した数は15万人から100万人と幅が大きい、最近の研究ではおよそ50万人と推計されている⁽¹³⁾。またシカゴ市への黒人流入数について、シカゴ『トリビューン』は1916年1月から翌年3月の間に4万人の黒人が流入したと書き、ある教会の牧師は7万5,000から10万人と主張しているが⁽¹⁴⁾、流入した黒人が全て市内にとどまったわけではなく、その多くが続いてデトロイト、ミルウォーキー、クリーヴランド等の都市へと移っていったことは見逃せない。センサスによれば、シカゴ市の黒人人口は1910年で約4万4,000人、1920年で約11万人で、10年間の増加は約6万5,000人であるが、ダンカン夫妻の研究はセンサスの増加数の94%の約6万1,000人が流入によるものと推定している⁽¹⁵⁾。同時期のシカゴ市の白人人口の増加が外国生まれの移民も含めて21%であることと比

表 3

	シカゴ市						
	1900年		1930年		1900—30年の増加		
出身地域	人数	合計に しめる割合	人数	合計に しめる割合	増加人数	合計に しめる割合	増加率
		%		%		%	%
イリノイ州	5,875	19.8	41,693	17.9	35,818	17.7	609.7
イリノイ州以 外の中西部	4,401	14.8	12,791	5.5	8,390	4.1	190.6
北東部	1,084	3.6	2,949	1.3	1,865	0.9	172.0
高南部 ⁽¹⁾	12,761	42.9	50,040	21.5	37,279	18.4	292.1
低南部	4,986	16.8	122,993	52.9	118,007	58.2	2366.8
西部	161	0.5	870	0.4	709	0.3	440.4
不明及び 外国生まれ	475	1.6	1,229	0.5	754	0.4	158.7
合計	29,743	100.0	232,565	100.0	202,822	100.0	681.9

(1) 1900年のシカゴ市の統計のみにインディアン・テリトリーが入っている。

備考 1. シカゴ市の黒人の出身地については、1910年と1920年のセンサスからは算

2. この表で使用している地域区分に該当する州は以下のとおりである。

イスコンシン、ミネソタ、ネブラスカ、ノース・ダコタ、サウス・ダコタ、ネティカット、ロード・アイランド、メイン、ニューハンプシャー、ヴァライナ、メリーランド、コロンビア特別区、ウエスト・ヴァージニア、オ関係)。低南部：ミシシッピ、アラバマ、ジョージア、ルイジアナ、アルニア、ワシントン、ニューメキシコ、モンタナ、アイダホ、アリゾナ、オ

出所：シカゴ市の1900年については、Twelfth Census (1900), Vol. 1, White Population of Foreign Parentage を各州毎に合計し、その値をて筆者作成。1930年については、Fifteenth Census (1930), Vol. 2, pp. よる。イリノイ州については、Twelfth Census (1900), Vol. 1, Part 1, (Washington; G. P. O., 1918), pp. 75—79, Fourteenth Census (1920),

イ リ ノ イ 州								
1900年		1910年		1920年		1910—20年の増加		
人 数	合計にしめる割合	人 数	合計にしめる割合	人 数	合計にしめる割合	増加人数	合計にしめる割合	増加率
	%		%		%		%	%
30,022	35.5	35,917	33.2	44,130	24.4	8,213	11.3	22.9
6,590	7.8	8,299	7.7	11,638	6.4	3,339	4.6	40.2
1,560	1.8	1,610	1.5	2,403	1.3	793	1.1	49.3
34,783	41.2	44,140	40.8	59,519	32.9	15,379	21.1	34.8
10,378	12.3	15,906	14.7	60,855	33.6	44,949	61.7	282.6
181	0.2	269	0.2	658	0.4	389	0.5	144.6
954	1.1	1,980	1.8	1,826	1.0	-154	-0.2	-7.8
84,468	100.0	108,121	100.0	181,029	100.0	72,908	100.0	67.4

出でなかつたため該当年のイリノイ州の黒人を算出し、表右に掲げた。

イリノイ州以外の中西部：オハイオ、インディアナ、アイオワ、ミシガン、カンサス、ウ北東部：ペンシルヴェニア、ニューヨーク、マサチューセッツ、ニュージャージー、コーモント。高南部：テネシー、ケンタッキー、ミズーリ、ヴァージニア、ノース・カロクラホマ、デラウェア、インディアン・テリトリー（1900年のシカゴ市の統計のみに一カンソー、サウス・カロライナ、テキサス、フロリダ。西部：コロラド、カリフォルゴン、ネヴァダ、ワイオミング、ユタ。

Part 1, pp. 706—25 の Table 31, Native White Population と Table 32, Native Tabl 30, Native Population から各州毎に引いて計算し、さらにそれを地域別に集計し 216—18 より。ただし地域別集計、パーセント計算、増加人数、増加率等は筆者の計算に pp. 702—05, U. S. Bureau of the Census, Negro Population in the United States Vol. 2, pp. 636—40 よりシカゴ市と同じ要領で筆者作成。

して、黒人人口の増加率148.2%は著しく高いといわねばならないだろう。

黒人史の研究者たちは、第1次大戦中に始まった北部諸都市への黒人の大移動を「アメリカ黒人史における主要な分水嶺」とか「合衆国の黒人史におけるもっとも決定的な大衆運動のひとつ」とみなしているが⁽¹⁶⁾、その評価はさておき、奴隷解放宣言以来、黒人は南部の中を移動していたし、1879年にはほんの数ヶ月の間に5万人もの黒人がカンサス州へ移動したこともあった。第1次大戦以前には大まかにいって西部と北部への二つの移動方向があり、概してその移動距離は短かった⁽¹⁷⁾。

表3はシカゴ市とイリノイ州の黒人の出身地域を示したものである。(なお、この出身地域の区分は移動と深く関係するシカゴからの距離の問題を考慮し、作成してある。)左側のシカゴ市の表では、どの出身地域も20世紀初頭の30年間に実数、増加率ともに大幅に増加し、各地からシカゴ市へ大量に黒人が流入していることがわかる。なかでも一番高い増加率、増加実数を示しているのが低南部である。そこで、1900年と1930年の出身地域を検討すると、ひとつの重要な変化が読みとれる。すなわち、1900年にはシカゴ市の黒人合計にしめる割合は高南部、イリノイ州、低南部、イリノイ州を除く中西部、北東部、西部の順に高かったが、1930年になると上位3位までの順序が変わり、低南部が1位に上昇し、高南部は2位に落ち、3位にイリノイ州がきている。高南部やイリノイ州からも引続き大量に流入してはいるものの、これをはるかに上まわる規模で低南部からの流入が増大し、1930年の合計にしめる割合では低南部だけが大幅上昇を示し、遂にシカゴ市の黒人の過半数にいたっている。つまり、1900年から1930年の間にシカゴ市へ流入する黒人の流れが、いわば高南部主流型から低南部主流型へと転換していることが読みとれるのである。

以上の点を右側のイリノイ州の表で若干補足しておこう。イリノイ州の場合もシカゴ市同様、州黒人人口にしめる割合の順位では1910年まで高南部主流型であるが、早くも1920年に低南部主流型へと転換している。センサス統計の不備からシカゴ市のより正確な転換期は確定できなかったが、この表の検討からしてシカゴ市の場合も低南部主流型は1910年代に始まったと考えてよいと思われる。

表3でいまひとつ注意すべき点は、シカゴ市の黒人人口にしめるイリノイ州出身者の多さである。これはとりもなおさず、イリノイ州内においても一定方向への黒人の移動が存在していることを示唆するものであるが、本稿ではこれ以上は立入らない。

低南部諸州からの移住は長距離の移動を必要とするが、1930年には低南部8州だけでシカゴ市の黒人人口の52.9%を構成し、低南部上位5州だけに限っても47.9%をしめている。実数では、ミシシッピ州出身の黒人は1900年の1,148人から1930年の3万8,356人へ増加し、ジョージア州出身者は1,092人から2万1,969人、アラバマ州出身者は1,092人から2万1,247人、ルイジアナ州出身者は618人から1万7,811人、アーカンソー出身者は291人から1万2,165人へと急増し、とりわけ上位3州のミシシッピ州、ジョージア州、アラバマ州の出身者の増加数が2万人を越え、移動の規模の大きさを示している。次節ではこれら3州を中心に、南部黒人の北部移住の南部側における原因を検討することにする。

2. 移住の原因

1910年代に政治的、社会的な動機に直接突き動かされて北部へ移住した黒人は決して少なくはなかった⁽¹⁸⁾。南部社会では裕福な黒人も、知識人の黒人も、高潔な人格の黒人も、全て黒人として一括され、最下層の黒人小作農層と同一視され、黒人全体として抑圧されていたからである。しかしながら、このような状況は1910年代の南部に固有の事象ではなかった。この時代に南部黒人を北部へ移住させた南部側における特殊1910年代的原因は経済的なものであった。

周知のごとく、作物質権制とクロッピング制を2大支柱とする南部の綿花モノカルチャアのもとでの綿花生産者の窮状は、すでに1890年代に全国的に注目されるころであったが⁽¹⁹⁾、粗放耕作による土地の生産性の低下や綿花価格の下落とこれに連動する信用不足などに対する改善はとりたててなされず、南部農業の構造的矛盾はその後も深化する一方であった。1910年代の南部黒人の移住は、まさにこの構造的矛盾と深く関わっていたのである。

はじめに、1900年以降州黒人人口比合衆国1位のミシシッピ州からみてみ

よう。1910年代に同州では、黒人人口が約7万5,000人減少し、綿花生産高は15%減少している。綿花作付面積は1918年に313万8,000エーカーで、これを100とすると1919年は91, 1920年は94, 1921年は84で、起伏はあるが大きな減少傾向を示している。エーカー当りの綿花生産高も1918年の187ポンドから、1919年の160ポンド、1920年の140ポンド、年のポンドへと大幅な低下を示している⁽²⁰⁾。1910年代におけるこのような綿花栽培の後退は、直接的にはボルウィーヴィルという綿花の害虫と1916年夏の洪水に起因するものであった。

州南西部に害虫が侵入したのは1908年で、州南東部や州東部は1909年頃であった。ルイスによれば「最初それが現われた後1シーズンか2シーズンの間は大きな影響は普通感じられない。その後甚大な被害と農業の混乱の時期がやってくる……ボルウィーヴィルの侵入が止んだとしてもその害虫による実際的な被害が減少するという事にはならない。⁽²¹⁾」まさに、綿花価格の下落と害虫の被害が累積し、綿花モノカルチャア的農業の構造的矛盾が深化していたところへ洪水が襲ったのであった。州南西部ではこれを機に市場むけの野菜栽培や食肉牛の飼育へと農業の再編が起こり、極端な場合労働力は30分の1で済むことになった。古くからのプランテーション地帯である州南東部や州東部ではそれすらできず「耕地がかなりの程度耕作されないで放置された」⁽²²⁾。プランターや銀行が融資を停止したからである。それゆえ、転作も休耕も、「1年に1度の収穫＝収入期までに必要な生産手段と生活手段の自弁⁽²³⁾」ができない黒人の小作農、クロッパー、農業労働者に「出て行くか餓えるかの問題⁽²⁴⁾」を鋭く突き付けた。また、負債が累積し、転作資金の信用貸しを打切られた黒人プランターも同様であった⁽²⁵⁾。

同じ綿花生産地帯でも州北西部のデルタ地帯は様相が異なる。同地方に害虫が侵入したのは1908年で、全域に広がったのは1914～15年であったが、綿花生産は「少くとも他のプランテーション地域ほどには、後退しなかった。」それは1906年の法律による排水計画——ボルウィーヴィルは暑くて乾燥した環境でははびこらないという——の賜物であった。州南西部5郡で1万8,000人近くの黒人人口が減少した1900年から1910年の間に、デルタの7郡では5万3,000人も黒人人口が増加していた。害虫被害「地域の途方にくれている黒人を馬車

でデルタ地域に運びこんだ」り、州外からの流入があったからである⁽²⁶⁾。

害虫被害と洪水を機に同州の黒人農民はプランテーションから追放され、あるいは自らの意志で、近隣の町や都市またはデルタ地域、アーカンソー州を中心とする他の南部諸州へ、そしてその後再び北部へ、または農村から直接北部へと移動していったのである。

州南東部のローレルやハッティスバーグの駅からは多数の黒人製材労働者も北部へ向った。町や都市に流入した黒人農民はその労働市場を過剰にし、従来の都市住民の賃金を引き下げる役割を負わされた。「我々はここで飢餓賃金で働いています。そしてある者は本当に失業中です」とか「ここでの賃金は大変低いので暮してゆけません」という都市黒人の窮状は、この時代、一層深刻化し、多い所では市の黒人人口の3分の1もが北部へ向ったのである⁽²⁷⁾。

最近の推定では、1910年代に同州から10才以上の黒人約14万9,000人が流出したとされるが⁽²⁸⁾、黒人の農民と都市住民との割合は正確にはわからない。しかし、当時の労働省報告を整理すると、同州出身のシカゴ移住黒人96人中、農村部出身68人（州南東部52人、南西部9人、東部7人、デルタ2人）、丘陵地帯2人、都市部26人（ジャクソン19人、メリディアン5人）となり⁽²⁹⁾、都市部の比率は高いものの、農民主流の移住であり、しかもほぼ害虫被害の深刻さに比例した移住割合であることがわかるのである。

次にアラバマ州をみてみよう。同州では、1910年代に黒人人口は約8,000人減少し、綿花生産高は大きく36.4%も減少している。主な綿花生産地帯は州中央やや南寄りの東西に帯状に広がるブラック・ベルト地域と州北部のテネシー河渓谷地域で、前者の一部に害虫が侵入したのは1911年で3年後には全域に広がった。後者に侵入するのは1916～17年頃である。害虫被害の結果、同州のエーカー当り綿花生産高は初年で31%も減少し、1912年から17年の5年間に綿花作付面積は377万エーカーから197万エーカーへと大きく減少した。同州においても、綿花価格の下落と金融的逼迫の時期と一致した害虫被害の損害を取り戻す「最後の努力をしていた」ところへ1916年の洪水が襲ったのである⁽³⁰⁾。

その結果、たとえばブラック・ベルトのダグラス郡の大プランターの場合、小作人に対する食料等の前貸しを打ち切り、7,000エーカーの綿花作付地を1917年

春には250エーカーの綿花、800エーカーのとうもろこし、450エーカーのからす麦・ピーナツ栽培に縮少してしまった。彼らは「生涯で初めて黒人を立ち去らせねばならなかった」のである。それゆえ、「もっとも激しい“脱出”は当然のことながらブラック・ベルト地域から」で、18ヵ月間で黒人人口の25%以上が流出した郡は少なかった。同地方は黒人小作農の割合が極めて高く、連邦農務省や赤十字が食料の配給を決める様な惨状で放逐されたり、飢えた冬を何とか越し春や夏になって、前貸しを受けると不在地主の土地から逃亡したのは、主にこの層だった⁽⁸¹⁾。

黒人農民は近隣の町や都市、テネシー州やアーカンソー州、北部へと旅出た。州内移動で特徴的なのは、テネシー河渓谷よりもバーミングハム地域へ行く黒人が多かったことである。ひとつには、この石炭と鉄の産業地域の2大鉄鋼会社では64~70%が黒人労働者だったことが示す通り、黒人にとってこの地域は雇用の中心地だったからである。また中心地バーミングハム市は大陸横断・縦断鉄道も集中する交通の要衝でもあり、黒人たちの北部への再出発地点でもあったからである。先の鉄鋼会社のある部門では75%が過去1年以内に農村からやって来た黒人だったし、別の鉱山会社では67%が数ヵ月前からの雇用者で、時経ずして彼らもまた北部へ向かう車中の人となったのである⁽⁸²⁾。

1916年4月から翌年5月までに、同地域の1鉄道だけで1万2,731枚の切符が黒人に販売されたが、目的地からして彼らは境界諸州やペンシルヴェニア州の鉱山へ向かう抗夫であったと思われる。北へ向かう他の3鉄道に乗った黒人はこの数倍に達するものと思われ、彼らはシカゴを始めとする中西部諸産業都市やフィラデルフィアへの切符を購入している。他の大小の都市からも北部へ行く黒人が続き、たとえば1916年9月から8ヵ月間に1鉄道だけでモントゴメリーから1,075人、セルマから210人の黒人が北へ向っている。エルドリッジらの推定では1910年代にアラバマ州から移動した10才以上の黒人は約8万2,000人である⁽⁸³⁾。

ジョージア州の場合、黒人人口が減少するのは上記2州と異なり1920年代であり、綿花生産高も1910年代は15.6%、20年代は20.1%の減少と一層低下し⁽⁸⁴⁾、上記2州が20年代には完全に回復したのとは著しい対照をなしている。

これは害虫侵入の時間的ズレによる。

州南西部に害虫が侵入したのは1915年で、翌年には同地方を被害甚大10郡と被害大10郡に分けられる程の猛威をふるっている。前者のひとつクレイ郡のある黒人は、1916年10月に「大雨とボルウィーヴィルは約9,000 梱の綿花の損害を与えました。それは種子とここのところの高値とで90万ドルはもたらすはずでした⁽³⁵⁾。ここでの平均収穫高は11,000 梱です。……誰も彼（黒人農民——引用者）を秋まで引き留めておこうとは思っていません。……それゆえ……彼は仕事につく機会がありそうなところへ移住したいと思うのです⁽³⁶⁾。」と書いた。ウーフターは面接調査の結果、北部から帰った者を差し引くと、同地方では7%ほどの流出であろうと推定し、その大多数は黒人の農業労働者層とシェア・クロッパー層であったと報告している⁽³⁷⁾。

州中央部のブラック・ベルト地域はウーフターが調査した1916～17年には害虫被害は顕著ではなかったが、1919年になると州南西部に近いメイコン郡の綿花生産高は半減し最低に落ちこんだ。一方、同地方の北東にあるグリーン郡は害虫被害で一時綿花生産高が減少したが、1919年にはむしろ1910年以来第2位の生産高をみた。勢いを得て高価な肥料をつぎこみ、農具を整え、多額の負債を抱えたところへ害虫が再度襲撃し、同郡の綿花栽培は絶望的破局を迎えた。1921年には前年の10分の1、22年にはさらにその4分1の収穫しか得られなかったからである⁽³⁸⁾。

1916～17年の間に、ビードモント地域から約300人、中央ブラック・ベルトから1,200人、20の害虫被害郡から3,200～3,500人、ワイヤー・グラス地域その他から1,200人の計5,900人ほどの黒人農民が州を去ったといわれるが、すでに害虫被害で苦しむ同州の西の諸州よりも北部へ移動する黒人の方が多かったのも当然といえよう⁽³⁹⁾。

労働者数で合衆国2位の同州のテレピン油製造や5位の林業は（1910年）、戦時体制確立による車輛不足も加わり生産が減少し、失業者、半失業者が増加した。彼らは都市で失業中の日雇い労働者同様、農村から流入した黒人と競合させられ、まさに「家族を養ってゆけない」がゆえに北部移住を決意している。最近の推定によれば、1910年代同州から8万7,000人（10才以上）の黒人

が流出している⁽⁴⁰⁾。

むすびにかえて

以上みてきたように、1910年代南部から北部、特にシカゴへの黒人の移住は、この時期に南部全域を襲った害虫とこれに追い打ちをかけるようにして起こった1916年の洪水による被害が作物質権制の矛盾を一挙に激化させ、この矛盾が、基本的には、クロッピング制をとるプランテーションの最下層の黒人を農村から追放することによって調整されたことから起こった、農民、特に小作農の中でもシェア・クロッパー層を主流とした移住であった。プランテーションから移動した黒人農民の一部は近隣の都市などの黒人労働者と労働市場において競合関係に陥れられ、先住の黒人を北部へ移住させる側圧を生み出した。かくして州内、南部内、あるいは都市や北部へという複雑な様相を呈しつつ、下層の黒人の農民や労働者層が家族とともに北部へ移住し、その後、顧客を失った黒人の商人、医者、弁護士、牧師といった比較的上層の黒人や裕福な黒人農民がこれに続き、やがて全階層的移住へと発展していったのである。

この1910年代の南部黒人の北部移住は、黒人の側からすれば、黒人農民が北部において工業プロレタリアートへ転化する契機となった点に最大の歴史的意義を見出すことができる。しかし、同時に、支配者側からすれば、この時代の移住は、一面では南部の農業の構造的矛盾を一時的、部分的に緩和し、州内の主要綿花生産地域の移動や農業の再編の契機をもたらし、州間、国際間の綿花生産競争を激化させ、ジョージア州に代表されるように南東部諸州の綿花生産の没落を決定付ける契機ともなり、他面では北部の独占企業の労働力需要を満たすものであった点は見逃せない。

しかしながら、北部の諸産業都市へ移住した黒人の生活がいかに「改善」され、「向上」したかという点、及び黒人解放運動史の側面や南部農業の資本主義化の側面からみたこの時期の移住の評価等々は、第1次大戦を契機とする北部の労働力需要を始めとする北部側の誘因の内容の検討とともに、今後に残された課題である。

〔註〕

- (1) *New York Times*, Dec. 4, 1978.
- (2) U. S. Bureau of the Census, *The Social and Economic Status of the Black Population in the United States 1974* (Washington, D. C.; G. P. O., 1975), p. 9.
- (3) この危険性を免れ、多くの示唆を与えているのが大塚秀之「1910年代のアメリカ黒人の就業構造」神戸市外国語大学『研究年報』9, 1971年, 83—132頁。
- (4) 古賀邦子「第1次大戦前後におけるアメリカ黒人の『北上問題』」『山口大学教養学部紀要』11, 1977年, 1—12頁。Robert Higgs, "The Boll Weevil, The Cotton Economy, and Black Migration 1910—1930" *Agricultural History*, Vol. 50 (April, 1976), pp. 335—50. 最後の引用について氏は C. O. Brannen, *Relation of Land Tenure to Plantation Organization*, (U. S. Department of Agriculture, Bulletin No. 1269), p. 45 を引用している。
- (5) Edward E. Lewis, *The Mobility of the Negro* (New York; Columbia Univ. Press, 1931), p. 103.
- (6) 菊池謙一『アメリカにおける前資本制遺制』未来社, 1955年, 1975年, 155—259頁, 本田創造・大塚秀之「南北戦争後の南部農業の展開」都留・本田・宮野編, 『アメリカ資本主義の成立と展開』岩波書店, 1974年, 194—245頁, 藤岡惇「プランテーションの経済構造」『土地制度史学』70号, 1976年, 1—23頁。
- (7) U. S. Bureau of the Census, *Negro Population, 1790—1915* (Washington, D. C.; G. P. O., 1918), (以下 *Negro Population* と略す) p. 33.
- (8) U. S. Bureau of the Census, *Fourteenth Census (1920)* (Washington D. C.; G. P. O.), Vol. 2, p. 19.
- (9) *Ibid.*, pp. 32—5.
- (10) *Negro Population*, p. 88.
- (11) *Fourteenth Census (1920)*, Vol. 2, pp. 50—9.
- (12) *Ibid.*, p. 779.
- (13) Charles H. Wesley, *Negro in the United States, 1850—1925* (New York; Russell & Russell, 1927, reprinted 1967), p. 283; Chicago Commission on Race Relations, *The Negro in Chicago* (New York; Arno Press, 1922, reprinted 1968), (以下 *Commission* と略す) pp. 79, 702; Hope T. Eldridge and Dorothy Swaine Thomas, *Population Redistribution and Economic Growth, United States, 1870—1950* (Philadelphia; American Philosophical Society, 1964), Vol. 3 (以下 *Redistribution* と略す), p. 260.
- (14) Allan H. Spear, *Black Chicago* (Chicago; Univ. of Chicago Press, 1967) p. 141.
- (15) Otis D. and Beverley Duncan, *The Negro Population of Chicago* (Chi-

- ago; Univ. of Chicago Press, 1957), p. 34.
- (16) August Meier and Elliot Rudwick, *From Plantation to Ghetto* (New York; Hill and Wang, 1966, 1970), p. 213; E. Franklin Frazier, *The Negro in the United States* (New York; Macmillan, 1957), p. 527.
- (17) 黒川勝利, 「南北戦争後の南部農業とアメリカ資本主義」『土地制度史学』66号, 1975年 pp. 43—66. Herbert Aptheker ed., *A Documentary History of the Negro People in the United States* Vol. 1, (New York; Citadel Press, 1951, 1969), pp. 713—27; Carter G. Woodson, *A Century of Negro Migration* (Washington, D. C.; The Association for the Study of Negro Life and History, 1918), Chap. 7, 8; Louise V. Kennedy, *The Negro Peasant Turns Cityward* (College Park; McGrath Pub., 1930, reprinted 1969), Chap. 1; Philip S. Foner, *Organized Labor and the Black Worker, 1619—1973* (New York; Inter National Pub., 1974), p. 129.
- (18) Kennedy, *op. cit.*, Chap. 2; Emmet J. Scott ed., “Letters of Negro Migrants of 1916—1918” *Journal of Negro History*. Vol. 4 (July, 1919) (以下 “Letters” と略す), pp. 290—340; do, “Additional Letters of Negro Migrants of 1916—1918”, *ibid.*, Vol. 4 (Oct., 1919) (以下 “Additional Letters” と略す), pp. 412—75.
- (19) 本田・大塚, 前掲論文, 205頁。
- (20) Donald B. and Wynelle S. Dodd, *Historical Statistics of the South, 1790—1970* (Univ. of Alabama Press, 1973), pp. 34—37; U. S. Bureau of the Census, *Negroes in the United States 1920—32* (New York; Greenwood Press, 1935, reprinted 1969) (以下 *Neg. in U. S.* と略す), p. 15; Lewis, *op. cit.*, pp. 107—8.
- (21) *Ibid.*, p. 115.
- (22) R. H. Leavell. “The Negro Migration From Mississippi” U. S. Department of Labor, *Negro Migration in 1916—17* (New York; Negro Univ. Press, 1919, reprinted 1969) (以下同書を 1919—17 と略す), pp. 17, 21.
- (23) 藤岡, 前掲論文, 8頁。
- (24) W. T. B. Williams, “The Negro Exodus From the South” 1916—17, p. 93.
- (25) Learell, 1916—17, pp. 17, 18, 21; Emmet J. Scott, *Negro Migration During the War* (New York; Arno Press, 1920, reprinted 1969), pp. 16, 65; Williams, 1916—17, pp. 93, 103—4; Lewis, *op. cit.*, pp. 17—8; *Commission*. p. 81.
- (26) 黒川勝利「ヤズー・ミシシッピ・デルタ農業の展開」『社会経済史学』142—4, 1975年, 81—99頁, 引用は91—2頁, 94頁. Leavel. 1916—17, p. 16, 18, 19.

- (27) Scott, *op. cit.*, pp. 15, 67; Leavell, 1916—17, p. 18; 引用は “Letters”, pp. 319, 305—6.
- (28) *Redistribution*, p. 260.
- (29) Leavell, 1916—17, p. 18.
- (30) *Neg in U. S.*, p. 15; Dodds, *op. cit.*, pp. 2—5; Horace Mann Bond, *Negro Education in Alabama* (New York; Atheneum, 1939, reprinted 1969), pp. 226—7; T. R. Snavely, “The Exodus of Negroes from the Southern States; Alabama and North Carolina” 1916—17, p. 60.
- (31) *Ibid.*, pp. 71, 56. 引用は pp. 61, 52; “Additional Letters” p. 440.
- (32) Bond, *op. cit.*, p. 236; Snavely, 1916—17, pp. 53, 55, 56, 63—64.
- (33) *Ibid.*, pp. 53—5; *Redistribution*, p. 260.
- (34) Dodds, *op. cit.*, pp. 18—21.
- (35) 1ポンド当りの綿花価格は1914年の7.35セントから、1915年の11.22セント、1916年の17.36セント、1917年の27.09セントへと、1915—18年にかけて急激な上昇を示している。U. S. Department of Commerce, *Historical Statistics of the United States, Colonial Times to 1970*, (Washington, D. C.; G. P. O., 1975) p. 517.
- (36) “Additional Letters” p. 422.
- (37) T. J. Woofter, Jr., “Migration of Negroes from Georgia, 1916—17, 1916—17 pp. 79—80, 82.
- (38) *Ibid.*, p. 82; Arthur F. Raper, *Preface to Pesatry* (New York; Atheneum, 1936, reprinted 1968), pp. 201—6.
- (39) Woofter, 1916—17, pp. 77—8; Scott, *op. cit.*, p. 60.
- (40) *Ibid.*, p. 85; “Letters”, p. 335—6; “Additional Letters”, p. 415; *Negro Population*, p. 513; *Redistribution*, p. 260.

(住所：川崎市高津区鷺沼2-16-10 第2 藤荘103)